



老美女は、南海部
山上に独居す！

九州の中央、大分県と宮崎県との県境、山塊の側面を縫うように走る県道を、いま一台のジムニーが、乾いたエンジン音とともに駆け抜けます。

尾根のカーブの膨らんだ路肩に車を止めて、大型の一眼レフを下げた小柄な青年が降りてきました。



「いい見晴らしだ、表紙に使えるかな……。」
眼下に広がる盆地は、神々の里、高千穂峡——。
五ヶ瀬川の深い峡谷が折り重なり、黒々と沈む谷の
緑が、淡い春霞を透して優しさを獲得し、嫺やかな母
の肌の小皺のようです。

源流たる椎葉の山群は、遙か南に乳白蒼の壁となって

連なります。

「桜は、まだまだ早いな。」

三脚を立て、長い望遠レンズを通して何枚か撮影した後、道路際の岩に腰を下ろして、谷とは逆の尾根を見上げます。鬱蒼と灌木が密集する尾根は、やがて名峰祖母山の穏やかな稜線へと続きます。

「何だあれ？ 廃道か……。」

灌木に埋没しそうな途切れ途切れのラインが、山肌を何度も折り返しながら尾根に沿って登っています。

望遠レンズをいっぱいズームして、その終端を探しますが、木立に隠れてはつきりしません。

「どこへ通じるんだろう？ 地図には載ってなかったと思うけど……。」

用意した山岳地図を、ジムニーのボンネットに広げ、県道の先を辿ると、50m程先にバス停があって、その部分に県道から分岐した道があります。

分岐後すぐに道の表記は消えてなくなりますが、方向からしてその道に違いありません。

「転回ジャッキも持っているし、行けるとこまで行ってみるか！」

バス停の際から分岐した坂道は、すぐに轍もはっきりしないダートに変わりました。

車一台がやっとで、廻りの枝葉が左右のウィンドウを頻りに叩きます。

尾根から続く傾斜面を欠きとった道路は、水勾配を谷側にとるため、ともすればガードレールのない崖方向にハンドルを取られます。

「暫らく、車が入ってないようだな……。」

ひやひやしなからさらに進むと、前方を背を曲げて背負子を背負った、白髪の婆さんが歩いています。

「お婆さん！お婆さん、どこまで行かれるんですか？良ければ一緒に乗って行きませんか？」

足を止めた婆さんが、スックと腰を伸ばし、しっかりした足取りで車の窓際に立ったのには驚きました。

「婆さんとは何よ！失礼ね！自分じゃまだおばさんくらいのつもりでいるんだから、いきなり後ろから大声で、いったい何なのよ！」

「す、すいません！気を悪くされたら勘弁してください、なんせこんな山道で、随分腰を曲げて歩いておられたので……。」

「背負子背負って、そっくり返えたら後ろにひっくり返るだろ、バカだね……。」

腰を立てて顔を上げた姿には、都会的な気品があります、肌の瑞々しさも、身のこなしのしなやかさも、確かに婆さんと表現するのは不適合です。

この長い白髪が高齢に見せているのか、齢の分からないおばさんだな……そう思って髪を眺めていると。

「何じろじろ見てるのよ……。アーン、あんた熟女趣味の変態なんですよ、こんな山奥でおばさんナンパして、車に連れ込んで……。」

「——そ、そんなんじゃないですよ、人聞き悪い。」

「この道路、どこに通じているか聞きたかったです。荷物が重そうだから、近くなら送って行こうかと思って……。」

言い終わらない間に、荷物共々助手席に乗り込んできて。

「だったら早く出して！急いでるんだから。」

「―――南海部 覚です、28歳、カメラマンやっています。」

「河田 玲、外科医師、年齢は内緒よ！」

二人とも、揺れる車内での唐突な自己紹介です。

「カメラマンって、何撮ってるの？」

「廃道、撮っています。」

「ハイドウ？」



「こんな道路のことですよ、滅多に人が通らない見捨てられた県道や林道を行けるとこまで行って、写真撮って専門雑誌に投稿する……。」

「そんな専門雑誌があるの？」

「あります、その雑誌が主宰する廃道同好会も数千人の登録者がいます。」

「何が面白いの？」

「通れそうもない局面を、頭を使い、工夫して突破するのが面白いんです。雑誌の使命は、そういった事例の紹介と用具の使い方、安全策の啓蒙です。」

「写真投稿すると、儲かるの？」

「殆ど収入になりません、半分ボランティアです。」

「―――で、あなたの生活は？」

「親の遺産がありますから……。」

「贅沢な人ね……そういうの無為徒食っていうのよ。」

「ムイトショック!？」

「私も、亡くなった亭主の遺産食い潰して暮らしているから……偉そうなことは言えないけどね。」

「それと、さっきのあなたの質問……この道路は、私の自宅に通じてるの。ほら、其のカーブの先が私の家よ。」

道路が急に拡がり、小さな広場となって、谷側の崖に迫り出す様に瀟洒なログハウスが建っています。

崖の先は、深い谷と乳白蒼の尾根の折り重なりがどこまでも見渡せる、最高のビューポイントになっていました。

「亡くなった主人が、この景色心底気に入って、10年前に土地を買ってこの家を建てたのよ。寄って行きなさい、お茶にしましょう。」

カウンター風のギャレイを備えた居心地のいいリビングで、絶景を見下ろしながらコーヒーを啜ります。

窓際の隅には流行の薪ストーブがあって、チムニーが勾配屋根に立ち上がり、ギャレイの上がロフトになって、恐らくこの屋の主の寝室でしょうか。

「ここ別荘ですか？何時もは都会の本宅に？」

「———住んでるのよ此処に、一年中。」

「でも、こんな人気のない寂しいところにたった一人で？水や電気はどうしてるんですか？」

「昔は林業が盛んでね、この辺りに営林署の作業場があったらしいの、それに引いてた電気をそのまま買い取ったわけね、水道はここから少し登ったところに湧水池があって、そこから配管してるし、地下に浄化槽設置して下の沢へ放流許可を取ってるわ。」

「食料品や生活用品の買い出しは？」

「だからこれがそうよ！」

背負ってきた背負子の荷物を指さします。

「週に2日、麓の集落の患者を診察してるの、あなた同様ボランティアよ。その時必要なものを集落のスーパーで買ってくるんだけど、車の免許持ってないから、県道のバス停から歩いて……。」

「———そりゃ大変だ。」

「此処に棲みはじめて2年目で東京のマンション売っちゃったの……二人とも本当にここが気に入ってね、主人が亡くなってからは大変だったけど、それ以上の思い出もここにあるし、一人で暮らせる間はここにいるつもり……。」

爽やかな空気がログハウスの吹き抜きを満たし、白髪の女医の凜とした佇まいが、この環境の健全性を際立たせています。

「あの……お医者さんですから、先生って呼んでいいですか、先生は髪を染められないんですか？美人だから、髪染めればもっと若く見えると思うんですが……。」

「色気売る相手もないしね……。それに私、皮膚が弱いだよ、髪染めで被れたら元も子もないわ。」

「それより、あなた廃道の写真撮るならこの周辺は絶好の撮影地よ、さっき言ったように昔は林業が盛んで、古い林道が迷路のように残ってるわ、私もそれを辿って山歩きするんだけど、よければ案内するわよ。」

願ってもない話です、役所での資料調査の手間が省けます。

「今日はこれからどうするの？女一人だから泊められないよ。」

「来た道を帰ります、麓の集落に宿をとっていますので。 また明日来ます、林道の案内よろしくお願いします。」

デッキに立って見送る女医の白髪が、沢風と夕日を受けて、燃えるように輝いていました。

次の朝から、ジムニーで行く林道散策が始まりました。

大抵は女医の山歩き（山菜狩り）の行程に付随同行したものでしたが、天気も安定し二人にとって健康的で楽しいものになりました。

山頂直下、穏やかな稜線の肩の部分に広大な叢があって、そこからの見晴らしは、ログハウスのそれを更に凌駕します。



「此処のほうがよかったんじゃないですか？ログハウスの敷地。」

叢にシートを拡げ、ランチの準備をしながら、カメラマンが尋ねます。

「此処は主人がサウスコルって名付けたの、エベレストの近くの地名らしいんだけど。湧水池より高い位置だから水が引けないの、それにここまでは背負子背負って登ってこれないし。」

「そうですね。」

「ねえ、質問なんだけど……。」

「何ですか？」

「もし、道が完全に行き止まりで前に進めない、Uターンしようにも道幅が無いときはどうするの？」

「転回ジャッキ使います。」

「転回ジャッキ？」

「説明するのも面倒だから、ここでやってみましょうか……。」

荷台のアンダーボックスからアルミ製の大きな器具を降ろすと、車の真下に挿入します、スイッチを押すとX状にアームが拡がりました。

「通称Xジャッキと言うんですが、4輪車のジャッキアップポイントは床下に4か所あります、その4か所をいっぺんにジャッキアップするんです。」

油圧ポンプを操作すると、ジムニーがゆっくり上がっていきます。

「このジャッキのいいところは、本体にレベラーが付いていて、ジャッキアップした車が、常に水平に保てるところです。これで、360度好きな角度で転回できます。」

」

ロックを外すと、Xの字の中心を軸として、手動で車が回転しました。

見ていた女医が思わず声を上げて拍手します。

「悪路走破用の道具はまだほかにもあります、スコップに鍬、倒木撤去のためのチェーンソー、スタック脱出用のロープやマット、土嚢、タイヤチェーンに……。」

「これは何するもの？」

Xジャッキの上で、ジムニーを独楽のように回して遊んでいた女医が、フロントバンパーに付いている機械を指さします。

「ウィンチです、主にスタック脱出に使いますが、大きな落石の撤去にも有効です。」

「これは？」

「牽引用のフックです、他の車を牽引するとき使います。」

「屋根の上のボックスは？」

「キャンプ用具が入っています、テントに寝袋、ツーバーナーにランタン……それに釣り具。」

説明するカメラマンの眼をじっと見つめて、

「お節介な質問なんだけど……。あなた、結婚は？」

「もちろん独身です。」

「恋人は？」

「いません……。」

「どうして？」

「それほどイケメンでもないし、背も高くないし、マッチョでもないし……。自分が女でも、自分とはつき合わないと思います。」

「でも、あなたお金持ちでしょ……もてるんじゃないの？」

「お金があっても、収入がないんじゃない女性としては不安じゃないんですか？つき合ってみて性格不一致ってこともよくあるし……。」

「あのね、生理的に男女はお互いを求めるものなの。男性の収入なんて関係ないわ、男女の性格が一致するなんてありえないし、お互い自分とかけ離れた部分に魅せられるんでしょ。」

「どういうことですか？」

「男と女の間には、みんなが考えてるより遥かに距離があるってことよ、容姿からしてそうでしょ。」

「？」

「正圧体形と負圧体形ってわかる？正圧が女性で、負圧が男性。」

「何ですかそれ？」

「人の体は骨格と筋肉と脂肪で出来てる、それを皮膚が被っているでしょ。女性は体

形が丸いくて骨格や筋肉の形が現れにくい、まるで体内の圧力が大気より高くて膨らんでるように。 男性は骨格や筋肉が表面に現れる、皮膚が大気に押されて折りこまれているみたいに……。」

「女性は体の表面積を小さくして、熱を逃さない体形で、男性は過剰になった熱を外に逃がす体形ともいえるわ。」

「それは、どうしてなんですか？」

「一般には、女性の生殖作用が高い温度で機能しやすく、男性のそれが低い温度で機能しやすいからって言われているけど、もっと他に理由があるのかもしれない。」

「いずれにせよ、男と女は根源的に違うし、ひょっとすると認識する世界も全然違うのかもね。 それを乗り越えて恋しあうわけだから、お互いのメンタルな事情なんて関係ないのよ。 求め合う理由はお互いのフィジカルだけなのよ。」

「今の若い娘はみんな痩せたがるんだけど、それ、ある種の誤解なのよね。 男は生理的にスケルトンな痩せた娘より、まるい体形に必ず惹かれる筈だから……。」

「姉が二人いるんですが、30越えてまだ独身なんです、二人ともどちらかというところポッチャリ系なんです……。」

「——男、嫌いなんじゃないお姉さんたち。」

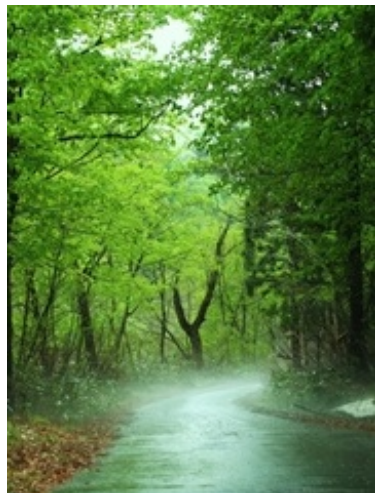
撮った廃道の写真を整理し、記事と一緒に東京の雑誌社にメールすると、長期取材の許可が下りました。

週2回の診察の送迎も、ジムニーの仕事となり、やがてログハウスでの女医の生活は、この4輪駆動車に依存し始めました。

雨上がりの朝、女医から携帯にTELがありました。

深夜から断水しているようで、湧水池まで行きたい、すぐに来てほしい、きっと取水口が昨日の雨で土砂に埋まっているんだと……。

眠気眼をこすりながら、早朝の集落を後にします。



湧水池はログハウスの下を流れる沢の上流にあります。静寂な冷気が被う池の端に、コンクリートで取水口を切っていますが、案の定大量の土砂で埋まっていた。

「上の方で崩落があったんでしょうね、沈殿柵も砂でいっぱいですよ。」

スコップと鍬で土砂を浚いながら振り返ると、女医は反対の尾根の中腹を凝視しています。

「どうしました？」

「あれ、車よね……なんか変じゃない？」

中腹の林の中に白くキラキラしたものがあって、どうやら自動車の窓ガラスのようです。

「林道からは少し離れてますよね、路肩踏み外して雑木林に突っ込んだんだらうか？」

「行ってみましょ！」

暫らく走ると、林道から外れて木々の間を降りてゆく、二筋の轍を見つけました。

30m程先に白いワゴンが止まっています。

「自分で降りていったみたいですね、様子見てきます。」

「ちょっと待って！」

カメラマンを制して女医が車に近づきます、慎重に窓を覗き込むと、慌てて口をハンカチで覆い、近くにあった石でフロントガラスをたたき割りました。

「硫化水素よ！離れて！」

「大丈夫ですか！」

「救急車呼んで！」

何台もの警察車両、消防車両で騒然となった林道の一隅で、女医とカメラマンは事情聴取を受けていました、救急車でカップルが搬送されてすでに一時間以上経ちます。

「そうです、この近くで私一人で住んでいます……。」

「この人は、私の案内で近くの林道を取材していて……昨夜の雨で水道が断水したものですから、朝から手伝ってもらって……。」

「取水口を浚っていたら、車が見えたんです……。」

「オフロードの経験は無いでしょうね、普通のワゴン車でよくここまで登れたと思います……。」

湧水池を浚い終わって、ログハウスに戻ったのは、西の稜線の陰が、周囲の色を奪い去る時刻でした。

「あの二人助かりますかね？」

「無理でしょうね、意識がなかったじゃない。」

「硫化水素は苦しいって聞きますけど？」

「多分、睡眠薬を併用しているわ、ガスだけじゃ死ねないもの。」

「どうして人は自殺なんてするんですかね……。」

「ノルアドレナリンとか、セロトニンの分泌不足なのよね。」

「何ですか？それ。」

「シナプス伝達物質、脳内の神経作用にかかわる物質なの……。不足すると誰でも死にたくなるわ。」

「自殺の理由も、本人のフィジカルですか？」

暗くなった空に星が瞬きはじめました、昨夜の雨が嘘のようです。

「そんなことより、今晚ここに泊まってくれない、近くで心中事件があったなんて気味悪くて……。」

「えっ、一緒に寝るんですか？」

「——あなた、テントと寝袋持ってるんでしょ。」

満天の星空に輝く女医の白髪が、鬼の鬘に思えてきました。

ログハウスから谷を見下ろすテラス窓の横に、背の高い年代物の硝子棚があって、本や小物の片隅に、隠れるように小さなフォトフレームスタンドが置いてあります。天窓からの陽光がたまたまその部分を際立たせて、初めてそれに気が付きました。中には山岳装備の男性の写真が・・・・。

「主人よ・・・・。」

背後から女医の声がしました。

「旦那さん仕事は何をされていたんですか？」

「同じ外科医・・・・。 同じ病院の勤務医だったわ、二人で開業できれば少しは楽だったんでしょうけど、そんな暇もなくて。 気が付けば二人とも老医師よ。」

「何で亡くなられたんですか？」

「・・・・。」



突然鋭い金属音が、弛緩しきった午後の大気を突き通します！

谷に漂う春霞の向こう側から、巨大な銀色の翼が、眼下の沢を舐める様な急角度で、一気に上昇してきました。

ログハウスの頭上を掠めると、背後の尾根を越えて見えなくなります、直後に電気スパークのような一瞬の光が辺りを輝かせ、低く籠った爆発音とともに、建物を震わす強い振動が伝わってきました。

「今のなに！」

「旅客機です！墜落しちゃったのか！」

大慌てで携帯を探すカメラマンを尻目に、女医は大きなリュックと、黒いバッグを持って外へ駆け出していました。

「110番、連絡つきました！山の頂上の方向ですよね！」

ジムニーのステップに足を掛けながら振り返ると、頂上の向こうから、黒煙が上がっています。

「――兎も角、サウスコルまで行ってみましょ、あそこなら状況が分かるわ。」

サウスコルの叢まで、それでも30分はかかります、緊張した二人は前方を見つめたまま一言も喋りません。

サウスコルの広場の、西側の沢が墜落現場でした。

立木が一面放射状に倒されています。

既に警察と自衛隊のヘリが上空を旋回していました。

焦げ臭い空気が辺りを漂い、所々で小さな火が燻ぶっています。

一眼レフをズームして現場に向けると……。

「写真撮るのは、まだ早いわよ！生存者探るのが先！」

暫らくすると、上空のヘリから隊員の降下が始まりました。

女医が降下してきた警察官と、何やら話しています。

「あなたはここで待ってた方がいいわ！素人が来ると大変だから……。」

——冗談じゃない！これでもジャーナリストの端くれ、航空機事故に遭遇したのも何かの縁、生々しい記録を残せるのは今は自分ひとり——などと気負って現場の沢を駆け下ります。

焼け焦げた機体の破片が散乱し、病棟の消毒剤のような異様な臭気が辺りに漂い、様々な素材がヘリのホバリング風に舞う様は、過去に何度もTVで報道された墜落現場そのものです。

遠くで歓声が上がり、女医が黒いバッグを抱えて駆け出すのが見えました。

所々にオレンジ色のジェルのような付着物が目を引きます、燃え残った木の枝にもべっとりついて、その中にとうもろこしの髭のような糸の束が絡まって……糸の束をつまみあげると、中から白い小枝がパラパラ落ちてきました。

拾い上げてよく見ると、紅いマニキュアが鮮明な、女性の指でした。

胃の周りが一気に熱くなり、視界が暗くなって意識を失いました。

「だから言ったじゃない！素人には無理だって！」

女医に頬を叩かれて気が付きました。

「司法解剖医だって、墜落現場に入るのは躊躇するんだから……。」

「このべたべたしたオレンジのジェルは何なんですか？」

両手に付着したのを払いながら尋ねます。

「乗客の遺体よ！体液と血が混ざった残留物、あとでちゃんと消毒しないとダメよ！」
その瞬間、再び意識を失いました。

一週間が駆け足で過ぎ去りました。

取材攻勢の喧騒もやがて下火になり、犠牲者鎮魂の合同葬儀も終了し、事故原因の調査や、航空会社の責任の追及も舞台を東京に移して、林道に静けさが帰ってきました。

「結局五人しか助からなかったんですね・・・。」

悲しげにカメラマンが呟きます。

「五人も助かったのよ、そう考えるべきね。」

女医が明るく応えます。

崖に突き出して建つログハウスの基礎の部分、建物を支える鉄筋コンクリートの内部に、浴室やランドリー、倉庫と一緒に和室6畳の客間があります。

あの墜落事故以来、カメラマンは体調を崩し、この部屋で女医の看病を受けていました。



「でも、あのオレンジの付着物が犠牲者の遺体だなんて、まだ信じられません。 思い出すだけで怖くなって・・・。」

「航空機事故のような加速環境の中では、人体は液体と捉えるべきなの、航空工学の事故解析でも、人体の質点挙動は流体で計算されているわ。」

女医がさらに続けます。

「ヨーグルトや豆腐の塊をコンクリートの壁に叩きつけるようなもので、液状化した組織が血液のヘモグロビンと混ざって、オレンジ色に見えるのね。」

「原型を留めるのは、質量の小さな末端部分の組織、髪の毛や手足の指くらいのものよ。」

「それ以上言わないでください・・・また苦しくなる。」

窓から見下ろす沢の木立には、待ちわびた山桜の白い花卉がちらほらと・・・。
陽光の明るさも増加して、季節は確実に林道の随所に、人の肌の温もりのような優しさを、惜しげもなく運び上げてきています。

「でも、先生はあれ以来ずっと元気ですね、少し若返ったみたいだ、輝いて見えますよ。」

「———そう？久し振りに人の命を救えたからね、医者の本分が甦ったのかな。 さあ、診察するからそこに座って、前を肌蹴て・・・。」

聴診器を胸に当てながら、何を思ったか片方の手を、スッとカメラマンの股間に忍ばせます。

「せ、先生！」

「これも診察だからね、気にしなくていいのよ……。」

脈をとる仕草でカメラマンの手首を掴むと、自分の胸の膨らみへといざないます。滑らかな肌の瑞々しさに、心臓が高鳴ります。

「やっぱりお婆ちゃんじゃ、気持ち悪いのかな？」

潤んだ目が見つめます。

「そ、そんなこと……。」

「じゃ、あなたの下半身、今から解剖させてもらうわね……。」

白髪のお婆さんが、火照った体をしなやかに覆い被せてきました。

――あれから10年が経ちます。

いま、一眼レフのフレームに収まる林道のログハウスは、立木や弦に覆われ、過日の面影はありません。

カメラマンが廃道の取材を終え、東京に帰った一か月後に、女医から長い手紙が届きました。

そこには、亡くなった旦那様のことと、現在の心境が綴られていました。

主人は医師の傍ら、本格的な山岳登山家で、5年前にヒマラヤで事故にあって亡くなった、遺体はまだ見つかっていない。

ログハウスの玄関から見送ったきりだから、ここで待ち続ければ、玄関扉を開けて帰ってくるような気がして、ログハウスを離れられないでいた。

あなたに会えて拘りが薄れた、事故現場で5人救って勇気が出てきた。

医者とは他人に関わらないといけない、人を助けないといけないと思う。

医療の現場に復帰したくなった。あの日あなたを解剖して、踏ん切りがついた……。

人が恋しくなったので、山を下りる……大分県の離島で診療所を任せてもらえることになった、島の鰹夫を片っ端から解剖してやるって……。



そんなことが書かれていました。

取材に使うジムニーも3代目、相変わらず無為徒食に違いはありませんが、カメラマンは山頂直下のサウスコルに車を進めます。

そしてそこは、まさに桜の園……。

犠牲者の慰霊を願って植林されたソメイヨシノの若木たちが、満開の華やかさの覇を争っていました。沢から吹き上げる風に花吹雪が舞って……。

「先生！これも先生がおっしゃってたフィジカルなんではないですか！」

全力で叫んだ声が山塊に木霊して、遥かでした……。

……おわり。

以上、全てはフィクションです。尚、添付した写真の一部はP h o t o A C及びP h o t o c kから転載させて頂きました。

老美女は、山上に独居す！

<http://p.booklog.jp/book/105037>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/105037>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/105037>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ